

行政視察報告書

この度、滋賀県近江八幡市及び東近江市を視察した概要について、別紙のとおりご報告いたします。

資料その他については、事務局に保管してありますので、ご高覧ください。

令和元年10月4日

総務文教常任委員会

委員長 菅原 恵悦

副委員長 加藤 勝義

委員 遠藤 忠裕

委員 大日向香輝

委員 高橋 聖悟

委員 佐々木喜一

委員 土田百合子

委員 塩田 勉

横手市議会議長 播磨 博一 様

総務文教常任委員会 行政視察報告書

■期 日 令和元年7月24日（水）～26日（金）

■視察地 滋賀県近江八幡市、東近江市

◎滋賀県近江八幡市（7月24日訪問）

《近江八幡市の概要》

滋賀県のほぼ中央に位置し、琵琶湖で最大の島である沖島を有している。ラムサール条約の登録湿地である西の湖は、琵琶湖で一番大きい内湖であり、ヨシの群生地である水郷地帯は琵琶湖八景の一つに数えられている。

古くから農業を中心に栄えが、中世以降は陸上と湖上の交通の要衝という地の利を得て、多くの城が築かれている。また、織田信長の改革精神により開かれた楽市楽座は、豊臣秀次の自由商業都市の思想に引き継がれ、さらに近江商人の基礎を築くものとなった。このような歴史的背景から、各時代を代表する歴史的遺産が点在するとともに、風情が薫る景観が今日も各所に残っている。

■面 積：177.45km²

■人 口：82,116人

■世帯数：33,788世帯

調査事項：VR安土城高精度システムについて

近江八幡市は平成22年に旧近江八幡市と旧安土町とが合併して誕生した。その当時の観光の状況として、旧近江八幡市には八幡山城や八幡堀（伝統的建造物群）があったが、旧安土町には安土城跡くらいしかなく、入り込み客数にも大きな開きがあった。安土城は城を復元しようとしても、国の特別史跡となっているため根拠なく作ることはせず、費用の面でも問題があった。そこで、バーチャルの中で全国、全世界に知られた安土城を再現し、市の観光振興に役立てようと「VR安土城プロジェクト」がスタートした。

平成25年4月には安土山周辺のビューポイントから創建当時の安土城がタブレットやスマートフォンで見られるアプリ「VR安土城タイムスコープ」をリリース。現在のVR安土城はその第2弾となっている。



▲視察の様子



▲第一弾としてリリースされたスマホ版タイムスコープ

現在はシアターも完成し、安土城の内外を案内するショートムービーの他、マニュアルモードと呼ばれる、専用コントローラーを使って映像空間内を自由に動き回れるバージョンもある。

安土城跡を訪れる観光客は年間6万5,000人程度で、その知名度とは裏腹に、非常に少ないのが現実である。城跡だけ

では当時のことも分からず、資料館や考古博物館は少し離れたところにあり、不便さが感じられたことから、考案されたのが「VR安土城」であった。

技術面では、最新のVR技術を活用するため、花園大学・大阪大学・京都高度化学研究所と官学の共同事業として行い、また、活用のより良い有効な方法を検討するために、観光関連団体、まちづくり関連団体と官民の共同で検討が行われた。現在は誘客のための新たな情報発信ツールの開発を進めている。

① VR安土城の構築に至るまでの推進体制について （プロジェクトチーム等の進め方について）

開発にあたって、「VR安土城創造会議」という会議を設置。構成委員としては観光やまちづくり等の各関係団体、地域の団体の代表者などに入っただき、「VR安土城プロジェクトチーム」の取り組み内容を承認するとともに、必要に応じ精査、意見を申すということを担当しており、全体的な方針をそれぞれの長を中心に決めていただいている。その下に「VR安土城プロジェクトチーム」を作っている。各団体の長に集まっただけだけでは、なかなか実際に動きづらいということもあり、実働部隊を作ったという形になる。また、外部アドバイザーとしてVRを専門にされている大阪大学の教授に、コンピューターで安土城を復元しようという事であるので近江八幡市の工業高校の建築やコンピューターの方を担当する先生にもそれぞれ入っただき、事業を進めた。

事業の経過だが、合併の平成22年度に内部検討を計31回行っている。具体的には平成23年度から事業がスタートしている。この事業では、各種大学との共同研究という形をとることで、費用をなるべく安価に抑えようと努め、地域と大学と行政との三者の共同での事業実施ということを中心に据えた。

最初にやったことは京都の花園大学との共同研究を実施している。平成 22 年度から 23 年度は、同大学の師^{もろしげき}茂樹・教授が研究室で歴史的建造物を 3D で復元するという研究をされていたので、安土城を 3D で復元しないかと市の担当から持ち掛けて、共同研究という形で天守の復元 3D モデルを作っていた。経費はおよそ 50 万円となっている。平成 24 年度には、大阪大学の福田教授との共同研究で、花園大学が作ったモデルデータを VR 用に、実用段階に移行する作業を行っていた。こちらの方も 50 万円弱の予算で行っていた。

またこの年、スマートフォン・タブレット版の VR 安土城アプリ i-O S 版の作成を行っている。こちらは京都高度技術研究所に委託をして行った。この機関は主に京都大学のオーバードクターが所属している研究のシンクタンク、研究所になる。ここで VR 技術についての研究が進められていたので、そちらと共同するような形で i-O S 版を 100 万円弱で作成していただいた。

これらのことから i-O S 版は各大学、機関との共同研究により 200 万円弱の費用で公開までこぎつけた。費用的には他の事例よりかなり安価になっている。



▲現在、放映されているシアタールーム（信長の館）

また、平成 25 年度にはもう一つの柱である高精度型 VR 安土城システムを作成している。こちらについてはプロポーザル方式で業者選定を行って作成したが、スマートフォン・タブレット用のシステムからすればかなり高額となり、3,720 万円ほどの費用となった。1 年という短期間で作り上げることができたが、その骨子となる城の画像等をスマートフォン、タブレット版のシステム

で既に作成済みだったため、そのデータをそのまま利活用して製作したため、時間も費用も圧縮することができた。

② 学術的視点からの活用の方向性について

復元にあたってはなるべく学術的視点を取り入れている。しかし、実際に作る時には、諸説があるためになかなか決まらないという問題がある。このため、ある程度観光の方に集約した形で実際の運用は行わせていただいている。例えばストーリーテラーを務める宣教師ルイスフロイスが大手門から入り場内を案内されたという設定



▲現在の安土城跡。石垣しか残っていない



▼上の写真と同じ場所からタブレットで見た VR 映像

はフィクションである。

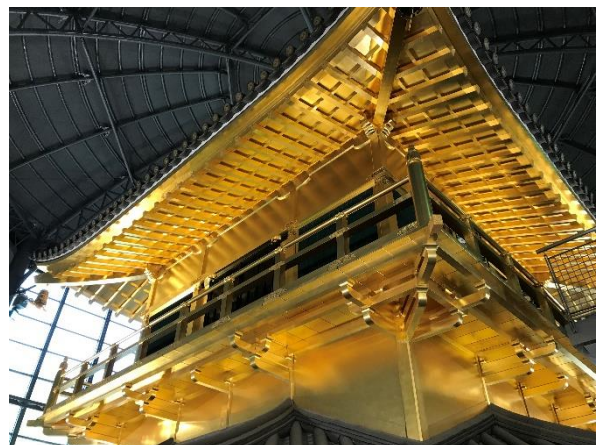
活用という面では、県の文化財担当者を講師に迎え、実際にVRを使いながら安土城の解説・ツアーをしていただくイベントを定期的に行ったり、京都国立博物館に実際に活用していただいたりしている。京都国立博物館でVR画像を使ってくれている奈良大学の教授は、近江八幡市の設定とかなり違う学説を唱えているが、説明する時に映像があったほうが分かりやすいということから活用いただいている。

また、学校教育でも映像を活用していただいております、郷土学習ではかなり大きな成果を上げている。

③ 観光ツールとしての活用の方向性について

新しい周遊ルートの構築という点が常に課題となっている。モデルツアーを実際に行った中での意見を参考にして、具体的なルートを検討することが大事だと考えている。

また、コンテンツ内容の修正刷新については、第一弾の映像を公開してから既に5年が経っており、VR技術は日進月歩で進んでいるため、どんどん新しいものができている。新しいものができると古いものはやはり飽きられてしまうことがあるため、何か新しい仕掛けを打つ必要があると考えている。現在、ドローンの映像と安土城下町の風景を見ることができるよう仕掛けを大阪大学と業者と協力して検討しているところである。



▲もう一つの観光の目玉「信長の館」天守

④ 今後の活動の広がり と 課題について

信長の館と実際の安土城跡については、それだけで十分魅力があるツールになるが、それ以外の場所が整備されていなかったり、移動するのに手段がなかったりと、課題があると考えている。反面、その2つを見るだけでも魅力があるし、付加価値（VR映像など）を付けていったら十分ツアーになるだろう、というような意見もいただいている。

また、第一弾にリリースされたスマホアプリでは、ダウンロードされた場所は分かっても、その方たちが実際に安土を訪れたかということは分からない。例えば平成25年には2,577件のダウンロードをしていただいたが、その内の2,000件近くが海外からのダウンロードであった。だが、それだけの数の海外の方が実際に安土に来られているかという、疑問である。そこら辺がはっきり分からないという事もあり、ストリートミュージアムというアプリに切り替えてきている。こちらは来訪者数が分かる仕組みとなっている。

最後に、効果の検証が難しいという問題がある。施設来訪者の増減だけで、その効果が図れるかという、そうではないと考える。観光等は実数が大事になってくるかとは思いますが、全体の減少傾向の中でどれぐらいの効果があるかということをはかるのはなかなか難しい。

◎滋賀県東近江市（7月25日訪問）

《東近江市の概要》

東近江市は、額田王（ぬかたのおおきみ）と大海人皇子（おおあまのみこ）の相聞歌の舞台となった蒲生野や、永源寺、百済寺、石塔寺など多くの古刹があることで有名。また、中世以降は市場町や門前町に連なる交通の要衝として栄え、近世には近江商人が活躍し、多くの企業家を生んでいる。さまざまな地域との交流を通して、数多くの文化がはぐくまれてきたまちである。

近代に入り、明治22年には市町村制が施行され、「明治の大合併」が、昭和28年に制定された町村合併促進法により、「昭和の大合併」と呼ばれる町村の再編が繰り返され、数回の合併を経て平成18年1月に現在の東近江市になった。

■面積：388.38km²

■人口：114,159人

■世帯数：44,469世帯

調査事項：映像を活用した災害時オペレーションについて

平成 28 年 4 月の熊本地震を受け、総務省は新たな防災・減災対策を地方自治体に呼び掛けた。そのひとつが、「リアルタイム映像を駆使した災害オペレーション」の整備である。この動きに先がけ、いち早くシステム導入に動いたのが東近江市で、市庁舎新館建設に合わせて、平成 26 年度に「危機管理センター」を新設し、各種システムとの連携やマルチディスプレイの設置など、最新の施設整備を進めている。このシステムを更に生かすために「現場の映像」を本部に届ける仕組みを導入している。

東近江市のシステムでは、地図情報との連動、映像を見ながら双方向での音声通話ができること、支部庁舎でも情報が共有できることを条件に検討された。映像が持つ情報量は圧倒的で、一瞬で現場の状況や情報共有ができる状況になり、迅速で精度の高いオペレーションが可能となった。

なお、秋田県でも SNS による情報収集・発信するシステムを構築中である。



▲視察の様子

① システムの概要と、実際の活用事例について

平成 28 年度には現場情報収集伝達システムというものを導入した。これはスマートフォンを使い、撮影した映像・音声を本部にリアルタイムで送信することができる



▲55 型×8 面のマルチディスプレイ

ものである。また、本部から現場へも指示ができるものである。そしてスマートフォンの GPS 情報により、現場の位置も地図上で確認ができる。本部のモニターでは最大 12 画面まで映し出すことが可能であるので、スマートフォン 12 台までは増やすことが可能。地図画面についてはインターネットに配信をしているので、ID、パスワードを入れれば世界中どこでも確認することができる。東近江市は合併しているので各支所があるが、支所でも確認ができる体制が出来ている。

② 危機管理センターの設備と運用体制について

平成 27 年度に防災情報システムを整備している。災害対応時は様々な情報を収集して対応を行っているが、視察時は風水害対応の例をモニターに映して説明があった。

平成 25 年に台風 18 号の被害があったが、この時にはまだ新しいシステムが稼働しておらず、古い庁舎の会議室での対応だった。写真にあるとおり、テーブルには何台もパソコンが並んでいるが、滋賀県防災情報システムや国土交通省のシステム、アメダスの情報など、それぞれのパソコンを覗かないと確認が出来ず、情報共有という意味でも問題がある状況だった。みんなに知ってもらおうとすれば、プリントアウトするしかなかったため、判断にも時間がかかった。

このような経験を踏まえ、防災情報システムにおいては映像処理を中心に整備を行った。それぞれのシステムやインターネットの情報を得るために、それぞれ専用のパソコンを準備しており、それをマトリックススイッチャーという機械を通して、マルチディスプレイや、後方の大型スクリーン、個別移動式モニターに自由に映し出せるようにしている。専用パソコンは防災情報統制室というところに置き、そこで見ている情報を大会議室側に映し出せるようになっている。

マルチディスプレイは、55 型× 8 面で構成されており、1 つの画面で複数の情報が同時に見られるようになっている。8 画面別々に映したり、2 画面、3 画面にしたりというような使い方もできるようになっている。防災情報統制室には消防署との直通電話や、市や県の防災無線、Jアラート、防災情報放送システムなどがつながっている。

このように、防災情報システムでは情報の一元化を図り、対策本部の部屋に来ればすべての情報が得られる。また情報の一覧性を高め、対策本部の職員が一目で一気に伝わるという点が、このシステムの効果だと考えている。



▲マルチディスプレイを操るスイッチャーを操作



▲防災情報統制室

調査事項：重伝建地区『五個荘金堂』における

「まちなみ保存会」と住民との関わりと取り組みについて

東近江市五個荘金堂重要伝統的建造物保存地区は、古代条里制地割を基礎に、陣屋と社寺を中心に形成された農村集落。近江商人が築いた意匠の優れた伝統的な建造物群となっており、周囲の水田景観を含めて、優れた歴史的景観を保持し、我が国で価値が高いとして、平成10年に選定されている。

また、町並保存会は平成19年3月にNPO法人化され、新たにスタートを切っている。NPO金堂まちなみ保存会は市から委託を受けた業務以外にも、各種の活動を展開し、生きがいの場、学習の場、おもてなしの場の提供や、子どもたちへの継承事業などを行われている。



▲まちなみ保存交流館での視察の様子

※この施設は空き家を再利用したものです

① まちなみ保存会の運営の現状について

まちなみ保存会をNPO法人として行っているのは珍しいが、法人化した一番の理由は、金堂まちなみ保存交流館を活動拠点として使いたいという事情があった。指定管理はNPO法人でないと受けられないという話があり、法人化に踏み切った。

良かったことはいろんな格が出るし、地域外の方にも会員になっていただける点である。悪かった点は、NPO法人にしたために会費を頂いているので、金堂地区の住民全員が会員という訳ではなくなってしまったことだ。法人化したことで、これから活動を展開していく上では広がり期待できるが、財政的にはそんなに裕福ではないし、当然市の補助金もいただいている。活動もボランティアで行っている。

東近江市も全国の状況と同じく、高齢化が進んでいることもあり、今のところは新しいことをしていこうというような大きな動きは出ていない。ただ文化財保護法も今年の春から変わり、活用の面でも力を入れるよう文化庁からも指導があったところである。市の担当課も文化財課から歴史文化振興課に名前が変わり、振興も考えろと市長からは言われているが、保護の方で手いっぱい、振興なり活用の方までは手が回っていない。

昨年からは観光物産課が重伝建の活用に力を入れていこうということになり、空き家の活用などについて、これから進めていくということになっている。それによって活用の方も少し動き出すのではないかと考えている。

五箇荘金堂地区が横手市の増田地区と違うのは、合併以前に重伝建に指定されている点である。合併前は町であり、規模が小さく、合併後の活用の方向性についても市としての一体感が乏しい。我々としては不満がある。横手市のように文化財保護課も観光物産課もというようにこぞって取り組んでくれている訳ではない。ようやく観光物産課が入ってきたので、これからの展開はまた変わっていくのかなと期待しているところではある。

② 文化財の保護と修理修景事業について

修理修景に係わるまちなみ相談業務は、NPO法人内のまちなみ景観委員会が担っている。委員構成は、歴史文化振興課、地元の相談員、自治会長にも入っていただいている。開催は月2回で、定期的に行っている。住民の希望をよく聞くとともに、景観維持のお願いもしなければならないので、一番住民と接点が多い委員会である。

重伝建指定当初は市が主導で修景事業を行ってきたが、当時一番不満が出たのが、きっちりやるように、という指導が徹底されすぎたことだ。裏通りの端っこの観光客も通らないような家にも同じような指導があるため、不満が出ていた。最近は規格を守ってもらえれば良いという事でやっている。

今一番困っているのは、登録物件でもなく、見えないところなのに、直すのに基準をどこまで守るかという点だ。また、登録物件でも、保護している登録物件になっていますよと言っても、ハンコを押したのは親父で、自分は知らないという人も増えてきている。五箇荘金堂地区は伝建指定されてから20年が経過している。親の代では伝建に賛成していても、代が変わり、関係ないと思っている若い人も出てきた。そういう時代にもう入ってきている。



▲保存会の皆さんと記念撮影

【視察を終えて ～委員所感～】

◎菅原 恵悦 委員長

①近江八幡市：VR安土城高精度型システムについて

VR(バーチャルリアリティ)安土城高精度型システムについては、城があったところに石垣があり、天主閣の裏付け資料がある。こうした歴史上の有名な資源があってVRを活かしている。

約30年前までは、3m位の道が城に通じる大手道と考えられていた。しかし平成元年から行われた「安土城復元プロジェクト」の調査の中で、お寺(惣見寺)が建っている石垣の下に道がもぐり込んでいる事を発見した。確認のため石垣を全部解体してここから先の道まっすぐ伸びるメインストリート(大手道)直線で130m、これが地面の下に埋もれているのが見つかった。当時の様子をCGで再現、大手道のわきには羽柴秀吉邸の櫓門があり敵を監視、戦国時代こうした櫓門が作られたのはこれが一番古いと言われている。当時と同じ道を再現すると人間の歩幅にあわない、また一段ずつの高さも違い、この道は馬足ではないかと言われている。この発掘により黒金門と名付けられた、先の安土城の主閣部「二の丸」は焼け落ちた後そのまま放置されていたことが判明した。

こうした画期的な発見がありながら、大手道の管理はお寺で行っている等から復元できない「安土城」は大きな課題であり、今現在、石垣だけがあるという所がロマンを掻き立てる。また、横手でも復元できるのではないかと思っただが、資料が無いことに改めて気づいた。フィクションがあっても可能な、後三年の役のアニメ映画を考えてはどうか。

②東近江市：現場映像を活用した災害時オペレーション(危機管理センター)

庁舎の改修・建設時に国の補助を活用し平成27年、28年に整備された8画面システムは一元化することで災害本部との情報共有が出来る等、素晴らしいものであった。

東近江市職員が3班編成で、24時間体制による対応の確立は良かった。また、よく氾濫する箇所を設置されたカメラからの映像はリアルタイムでみられ本部側の的確な判断を仰ぐことができる。しかし災害時に移動カメラで「危険な現場を撮影する人」について、誰がどの時点までリアルタイムな映像を送り、本部側の的確な判断を仰ぐか、という問題が大きな課題として残っていると感じた。

③東近江市：NPO法人「五箇荘金堂」まちなみ保存会

平成10年に重伝建に選定され、平成19年に「特定非営利活動法人金堂まちなみ保存会」としてNPO法人格の認可がおり、主に、市からの委託を受けた伝建事業に関わる相談業務を行っている。13年目を迎え、規模の大きさや高齢化、あるいは後継者問題等も含め難しい課題の中、住民との修景相談(やわらかく、

クッション役)の役割が大きいと感じた。

良い面、悪い面がある。例えば、何か収入になる取り組みが必要だ。観光に増田は交通面の課題等がある。また、「五箇荘金堂まちなみ保存会」は観光に特化した修景だけではないのでは等、横手市の取り組みと対比してみられたのがよかった。

また、「五箇荘金堂」まちなみ保存会の皆様の熱意に好感を持ち、当委員会の皆様が「五箇荘金堂まちなみ保存会」の収入源となる「かりんとう」販売に協力できた事も良い経験として嬉しく感じた。

◎加藤 勝義 副委員長

①近江八幡市：VR安土城高精度型システムについて

○視察内容とその感想

1. VRを活用し、安土城をバーチャルで見ることができる事に興味があった。横手市でも後三年の合戦や大鳥居史跡などに利用できるのではと思った。説明を受け、バーチャル作成のためにはより正確に復元することが大切との基本的スタンスが重要との事。そのためには図面や資料があり、それを基として復元したとのこと。横手市の後三年や大鳥居は、史料が少ない。大切なのは形として復元するためのデータなどが必要と感じた。
2. バーチャルのみならず、安土城天守の最上部5階6階分が原寸大に忠実に復元された信長の館も視察した。「幻の名城」と言われた安土城であったが、近年に加賀藩の御抱大工に伝わる「天守指図」が発見され、安土城であることが確認された。その後スペイン・セビリア万国博覧会の日本館のメイン展示として、内部の障壁画と共に原寸大で復元された。万博終了後に旧安土町が譲り受け移築したものである。そして指定管理として運営している。

○まとめ

有形や無形（VR）の復元などには、基本となる史料や発掘などの調査による裏付けが必要不可欠。更には観光を目的とするものであれば、ネームバリューも大きな位置付けとなる。来年のNHK大河ドラマ「麒麟がくる」で、明智光秀を主人公として放映が始まる。その際に信長にゆかりのある滋賀に注目が集まるとして、安土城の復元の検討が始まった事を側聞した。費用や土地所有者、県民や関係者には期待と不安があるという。まさにネームバリューは話題に事欠かないのである。大きな費用をかけて実物を復元するのか、VR視覚による復元なのか自治体の難しい判断も迫られる。

以上の事から、横手市では史跡の詳細調査を行い、まずはVRを作成できる史料を収集する事。そして、VRは集客や観光での活用ではなく、市民の郷土愛を育む事への活用で良いのではと感じた。

②東近江市：現場映像を活用した災害時オペレーション(危機管理センター)

○視察内容とその感想

1. 平成 28 年の熊本地震を期として、現場映像を駆使した「災害時オペレーションシステム」を整備した施設。マルチディスプレイなどにより情報の一元化に対応している。まずは「百聞は一見に如かず」であった。庁舎改修と同時に、システム導入やフロアを新設していた。8 マルチ大画面は圧巻であった。特に現場映像をリアルタイムで本部に届けて迅速かつ的確な災害対応に努めていた。現場からの情報を、危険と紙一重状況の中で誰がどのように情報を届けるのか課題である。被災後映像も重要であるが、リアルタイムでの被害進行状況の映像情報をどう得るのかも重要と感じた。国や県管轄河川は 24 時間映像で監視し発信しているが、市の小河川で、頻繁に氾濫している河川に監視カメラを設置していたことは感心した。横手市でも氾濫注意小河川に監視カメラを設置してもいいのではと感じた。

○まとめ

思ったよりも安価でシステムを設置出来ていたが、どんなシステムを必要とするのかは、自治体によって違う。地震、豪雨、台風、豪雪などが発生しやすい地域で異なる。どの災害に重点を置き対策をするのかで違ってくる。また、このシステムは情報を得ることに関し重点を置いているが、市民への災害情報発信が弱いのではと感じた。

③ 東近江市：NPO 法人「五箇荘金堂」まちなみ保存会

○視察内容とその感想

1. 近江商人のまちとして有名な地域。平成 10 年重伝建として選定され、平成 19 年にまちなみ保存活動をしていく団体に、行政が NPO 法人に運営委託をした。増田の重伝建は民間任意団体であるまちなみ保存会と、修理修景事業は建築士団体であるまちなみ研究会へ委託している。重伝建選定の際はこの「保存会」なる住民団体を組織し、文化庁へ届出する事が不可欠である。多数の自治体は行政主導で保存団体を組織し、その後も行政主導で運営されているのが現実である。NPO 法人が運営されているのは、稀である。本来はこの五箇荘金堂まちなみ保存会ように住民主体で運営されるのが理想である。まちなみ保存活動をする NPO 法人の運営方法に興味があった。NPO 法人事業は重伝建のまちなみ保存や利活用、そして修理修景事業の支援のほか、当然、本来の NPO 法人が行う他事業運営や経営もしなければならない。しかし、子供たちの地域活動の支援や地域イベント活動など多岐にわたっていた。荷が重すぎるのではと感じた。運営資金は委託や指定管理料で運営しているとのことだったが、NPO としての独自収入や基となる収入源を聞いたところ、カリントウ販売の売上収入との事だった。

○まとめ

重伝建エリアが増田の 10.6ha の 3 倍の面積 32.2ha の広範囲であり、活動の大変さが伺い知れた。活動後継者や、地域の理解度そして行政の関わりも関心があった。

視察当日は、平日だったこともあり殆ど観光客がいなかった。観光に特化していないとしても、古い街並みを後世に残すにはそこに住んで生産や消費活動が伴って暮らしを維持しなければならない。観光交流人口による活性維持をするのか、地域の産業や商業活動による地域維持なのか難しい問題と受け止めた。

増田のまちなみも同じである。シャッター通りはカフェなどが増えて、賑わいが創出されつつあるが、その収入での営業は厳しいものがある。公開家屋の見学料は、一部の方々のみ恩恵がある。この五箇荘金堂まちなみだけを見学したのだが、滋賀には他にも重伝建地域がある。その他観光地も多い。まさに一観光地のみでなく、他地域との連携が不可欠である。これは横手市にも言える。増田まんが美術館や増田のまちなみ、近隣の角館や温泉地など、他自治体との連携が今後の課題となると感じた。そして、半強制的に地域活動を促すのではなく、行政と住民の自主的活動と正に協働のまちづくりが必要である。

◎遠藤 忠裕 委員

①近江八幡市：VR安土城高精度型システムについて

安土城跡があったとされ、現存する石垣がある。ただ、現在城跡は、寺院の所有となっていて寺院が、入場料を徴収し、入場させていた。県、市が手を出せない状況になっていた。観光資源としてもっと活かせる方法があると感じた。

VR安土城がある、信長の館では、学術的な問題を抱えていたが観光資源としての視点から、天守閣の模型を作ることにしたという事だった。織田信長の権力、勢力がいかにかいかに大きかったのかが想像できる、作りになっていた。

②東近江市：現場映像を活用した災害時オペレーション(危機管理センター)

市の防災施設を、視察研修した。8面のパネル画像や大型画面、4つに仕切ることができる大会議室、全職員を対象にした役割分担表の作成が、毎年見直しをしながら進められていた。また、独自に危険河川にカメラが設置され、監視体制を整えられていた。

④ 東近江市：NPO法人「五箇荘金堂」まちなみ保存会

近江商人のふるさと、金堂地区は、平成10年12月に国の重伝建保存地区に選定された。建築物198棟、工作物(門、塀、石橋など)105件、環境物件(庭園、樹木など)9件、環境物件(水路)1件が対象で、地域がまるごと保存地区のようだった。まるで江戸時代にタイムスリップしたように感じた。近江商人の往時の繁栄が偲ばれるものであった。

現在、NPO法人が主体となって運営をしていたが、選定から20年が過ぎ、いろいろな課題があり、苦心をしているようだった。国、県、市が今後どの様な対応をしていくのか、見守りたい。

◎大日向 香輝 委員

①近江八幡市：VR安土城高精度型システムについて

概要 安土城の持つ歴史、観光資産としてVR技術を駆使して、観光客に目に見える形で楽しんでもらおうとして構築された

所感 歴史上有名な背景が存在し、そこにあつたと裏付ける資料が存在していたためシステム構築が可能であったと感じる。織田信長というファンの多い歴史上の人物や、安土城という想像でしか存在しないミステリーな建物が資源としてうまく活用できていると感じた。横手市で挑戦するには資料の存在が無く、歴史上のインパクトが全然足りないのではと思う。

②東近江市：現場映像を活用した災害時オペレーション(危機管理センター)

概要 危機管理センターと現場のリアルタイム映像を活用した災害対応

所感 いま起きている現場の状態が危機管理センターにしながら映像で把握できることは素晴らしい。ただし、情報を共有する目的で現場において撮影作業をしている人に危険は無いかな。もっとシステムを有意義に活用出来ないか。例えば救急救命士と医療機関など幅広く活用できないかな等模索してみるのも一考あると思う。

③東近江市：NPO法人「五箇荘金堂」まちなみ保存会

概要 重要伝統的建造物群を地域住民がどのようにして守り、維持しているか。

所感 維持していくための資金繰りに大変苦労している。後継者が不足しているなど問題が山積みのようなようだった。平日のためか観光客も少なく、ひっそりとした光景には観光を目的としているのか、現存しておくために活動しているのか不明瞭であると感じた。唯一の資金源として購入するようお願いされた、かりんとうは美味しかった。

◎高橋 聖悟 委員

①近江八幡市：VR安土城高精度型システムについて

安土城のあった風景を覗いける！？体験型VR観光アプリ、ストリートミュージアム。そのストリートミュージアムでは、かつて存在した城郭などの史跡を、高精細かつ色鮮やかなVR (Virtual Reality) で蘇らせます。GPS位置情報と連動して、まるでタイムスリップしたかのような体験を体感することができました。

近江八幡市内に設けられた12ヶ所のビューポイントから、かつてその場所から見た当時の安土城の姿がフルCGパノラマで再現されるシステムで亡き歴史遺産、安土城の姿を仮想体験できました。また、VR安土城は信長の館に専用機器を設置し、常設公開をしていました大型スクリーンに投影された天主や城郭・城下町などを、まるで当時にタイムスリップしたかのように散策することができるものでした。安土城にはVRを体感できる5ヶ所のVRポイント、城下町を中心とした10ヶ所の歴史スポットの解説があるそうです。VRポイントを訪れるとVR体験をその場で行えるだけでなく、一度訪れたポイントのVR画像をコレクションすることができるなど、コンテンツの充実も図っていたようです。

この手法は、我が町の取り組みにもいかせるのでは。研究はまだ道半ばであるが、仮想の仮想で、後三年の役に関する部分に重ね、活かすことができるのではと感じてきたところです。

②東近江市：現場映像を活用した災害時オペレーション(危機管理センター)

マルチディスプレイの設置(55型8面)の設置により情報の一元化と一覧性を高めた防災情報システムの整備、また、現場の映像情報をリアルタイムで本部に届けるシステムを導入し、迅速・的確な災害対応に努めていました。マルチディスプレイの有意性を感じたことは、8画面あることから、同時に沢山の情報を知れること。視覚でわかり、本部がしっかり状況を把握できること。また、天気のメディアとも互換性を図れるなどです。また、現場と本部がスムーズに連絡が取れるようデバイスの利用法も確立されていました。

また、本部のある庁舎、危機管理センター内部の配置、使い勝手もシステム化されており、ドタバタ劇を演じることはなさそうでした！(配線、コンセント、モニター、机の配列などなど)また、災害時の職員の応援体制も、階層的ルールを作り各々の出動と勤務時間を明確にしていました。大変良くできたシステムでしたが、消防が単独ではなく組合であることへの疑問とそこからくる、市との連携性に少しばかり疑問を抱いてきたところでした。

③東近江市：NPO法人「五箇荘金堂」まちなみ保存会

重伝建事業については、横手市では増田地区において現在、鋭意進められているが、諸課題も見えてきている。それと重ね合わせ、他地域の重伝建はどういった取り組みをしているのか観てきたところであるが、やはり保存会というものはあるものの、次世代の参画や住民の関わり具合、永続的な保存に難儀をしている

ようだ。

また、NPO法人であるが故に運営経費捻出にもそのようだ。お菓子等のお土産は販売しているようだが。まちなみは風情があり情緒的だが、そればかりでは将来的に大変だと思った。我が町の伝建も含め、保存させていくには、将来的な長い目線の計画の必要性を感じてきたところである。

◎佐々木 喜一 委員

①近江八幡市：VR安土城高精度型システムについて

歴史上有名な安土城をVRで再現し現代に再現し、観光に結びつけた事業であった。パリ万博で実物再現展示した安土城天主もこの施設の目玉としてあり、誘客に繋げていた。横手では後三年資料館等での活用もありそうだが、まだ歴史的史実の資料が充分ではない。

②東近江市：現場映像を活用した災害時オペレーション(危機管理センター)

リアルタイムで災害本部にいる全員が、現場映像情報を確認共有できるシステム。公共の情報、県や市が設置しているカメラ、現場での映像情報等が一つの大型画面に同時に映し出されるこのシステムは、予算的にも設置可能と思った。

③東近江市：NPO法人「五箇荘金堂」まちなみ保存会

近江商人と呼ばれ全国に知られた皆さんの出身地域街並み。農業地帯での歴史もあり商人として他地域で自立している立派な住家も多く、この地区で現在住まわれている方たちとの違い、さらには世代交代、高齢化など保存していくには相当な課題があるようだった。

◎土田 百合子 委員

①近江八幡市：VR安土城高精度型システムについて

平成22年に、(旧)近江八幡市と(旧)安土町との合併を機に、市の観光振興に役立てようと「VR安土城プロジェクト」がスタートしている。最初に、市役所で説明を受け「信長の館」、安土城跡地を視察。安土城は、織田信長によって建設された世界で初めての木造高層建築と言われ46メートルの壮大で絢爛と絶賛されたが、わずか3年後の1582年に起きた「本能寺の変」により主を失い、1585年に廃城となり幻の名城と呼ばれてきた。近年に、加賀藩のお抱え大工による「天守(主)指図」が発見され、1992年(平成4年)「スペイン・セビリヤ」万国博覧会、日本館のメイン展示として安土城天主の最上部5階6階部分が原寸大にて復元される。その後、万博終了時に、安土町が譲り受け、解体移築し新たに、追加復元され保存、展示がされている。調べてみると、1918年「大正7年」安土城保存を目指して「安土保勝会」が設立されてスタートしている。現在で

は、最新のVR技術を活用するため、花園大学、大阪大学・京都高度化学研究所と官学の共同事業が行われ、平成25年からは、VR安土城周辺のビューポイントから、タブレットやスマートフォンから創建当時の安土城が見る事ができる。

【所感】

織田信長と城という歴史的な資源が最大限にいかされていて、戦国時代にタイムスリップしたかのような感じで体験することが出来た。「VR」コンピューターによって作られた仮想的な世界を、あたかも現実世界のように体感できる技術は、あらゆる分野で今後、広がって行くと思う。当市の、後三年合戦や大鳥井山遺跡など近江八幡市が取り組んでいるVR（バーチャルリアルティ）で歴史的遺産を活かすことが出来ればと感じた。

②東近江市：現場映像を活用した災害時オペレーション(危機管理センター)

近年、全国的に自然災害が頻発に起きている状況にあり、災害本部の機能強化は、市民の生命、財産を守ることに繋がる。東近江市の現場映像を活用した災害時オペレーションは、「災害現場の映像」が本部に届く仕組みを導入し、地図情報との連動、映像を見ながら双方向で音声通話ができ、現場の状況や情報共有ができるシステム。実際に災害を想定して現場の状況把握のやり取りも見せて頂き当市でも情報システムの整備は必要と感じた。

【所感】

災害時の早急な対応を8画面のリアルタイム映像から判断できる整備は、災害本部で情報の一元化で情報共有できるため迅速な対応が出来る。例えば、市の氾濫する河川にカメラを設置し、災害情報を早急に市民に発信することができる。先進事例から、多くの事を学ぶことが出来、当市でも映像を活用した災害時オペレーションは、導入するべきであると感じた。

③東近江市：NPO法人「五箇荘金堂」まちなみ保存会

重要伝統的建造物群保存地区選定については平成10年12月25日選定される。

- ・東西670メートル、南北520メートル、面積32,2ha
- ・伝統的建造物数300棟、環境物件9件

<選定の理由>

近江商人が築いた意匠の優れた伝統的な建造物群となっており、周囲の水田景観を含めて優れた歴史的景観を保存し、わが国で価値が高いとして平成10年に選定される。

<NPO法人金堂まちなみ保存会設立の経緯>

- ・平成7年4月1日 金堂町並保存会発足
- ・平成10年6月 金堂町並保存会発足青年部新設
- ・平成19年2月 「特定非営利活動法人金堂まちなみ保存会」となる。

- ・平成 21 年 4 月 金堂まちなみ保存交流館運用開始
- ・まちなみ相談業務を市から委託を受ける
- ・平成 24 年 3 月現在、正会員数 143 名・法人賛助会員 15 名・賛助会員 11 名で活動中

< N P O 法人金堂まちなみ保存会の活動 >

1. 市から委託を受けた伝建事業に関わる相談業務
2. 金堂町並み保存交流館の生きがいの場、学習の場、おもてなし場、として活用
3. 次世代にまちなみと伝統文化を継承する活動として子どもたちに体験学習の実施
4. 市が実施しているイベント「ぶらりまちかど美術館・博物館」等積極的な協力
5. 道路河川の清掃並びに錦鯉の補充と錦鯉の品評会共済で鯉の補充
6. 先進地への視察交流活動・全国伝統的建造物群保存地区協議会住民研修会への参加
7. 広報誌「金堂まちなみ保存会ニュース」の発行、ホームページによる広報活動

【所感】

N P O 法人金堂まちなみ保存会の活動が明確に示されていることで、非常に補助金の使用についても市民の理解を得ることが出来る。

また、相談業務については、住民が気軽に相談できる役割は非常に良いと思う。このような点は、取り入れるべきであると感じた。また、人材育成のための子どもたちに体験学習の実施なども貴重な取り組みである。伝統地区と防災については、消火器全戸配布・防災マップの作成・女性消防隊編成・1 回月訓練と器具点検・消火器の各戸配布（150 本設置）・2 号消火栓設置（15 カ所）徹底した取り組みから学びたいと思う。今後の保存会活動の課題は、住民意識の向上と若年者のふるさと離れと、空き家対策、空き家の有効利用と保存対策である。

当市では、増田地区が重要伝統的建造物群保存地区に選定されているが、今後の課題として、高齢化と後継者の育成、地域住民自らの活動、保存と活用など、今回の視察から学ぶべきことは多く、大変に充実した視察だった。

◎塩田 勉 委員

①近江八幡市：V R 安土城高精度型システムについて

安土城については城自体が焼失しても石垣が現存していることは素晴らしい。今後史跡として十分活用できると思う。琵琶湖周辺には数多くの史跡名勝や観光地があり、琵琶湖一帯を網羅した観光マップがあれば良いと思った。前九年の役、後三年の役についての横手市としての取り組みがまだなされていないのが残念。（発掘などは行っているが）旧横手市以外の地域との連携が課題であると考

える。

②東近江市：現場映像を活用した災害時オペレーション(危機管理センター)

最新のシステムは素晴らしい。横手も災害は少ないが、雪害を除けば水害が発生する所なので、もう一度検証が必要だと考える。昨年の大森の水害。400戸以上が床上・床下浸水したが、これは70年ぶりのことであった。今一度、その時の対応を含め、見直しをかけるべきである。東近江市のシステムは、本部が立ち上がった時には情報がリアルタイムに入ってくる。この体制は全国でも最先端と言って良い。

③東近江市：NPO法人「五箇荘金堂」まちなみ保存会

重伝建でNPOを立ち上げ保存活動をしている事が素晴らしい。水田を含め32ヘクタールもの広大な土地を維持管理しており、環境が守られていると感じた。指定管理料を含めて、行政頼みではなく住民自らが地元の本来あるべき姿を残そうとする取り組みが素晴らしい。今後、NPOを継続していけるかどうか（後継者問題など）がポイントだと考える。増田についても地元の意見や将来どうあるべきかの、どのように守っていくのかというような話し合いがあるべきだ。行政主導ではなく地元から声を上げていかなければならないということを強く感じた。

以上、報告いたします。